『秘密の花園』における英国－インドの力学

川 端 有 子

What Mary has brought back :
――Dynamics of England-India in *The Secret Garden*――

KAWABATA Ariko

はじめに

『秘密の花園』(1) は Frances Hodgson Burnett の晩年の作であるが、彼女の作品中もっとも成功を収めたものであるというだけではなく、その豊かな象徴性と共に、構造の曖昧さやたじろぎのために、児童文学の中でももっとも幅広い解釈を呼ぶテクストのひとつとなっている。作者も意識せぬまに、混じりこんだ様々な文学的、文化的なものはもちろん、社会的、歴史的、政治的、イデオロギー的要素は、ここにきわめてユニークな間テクスト的空間を作り上げたのである。このため、出版当初から現在にいたるまで、このテクストに向けられた批評の数々は、まさに児童文学批評の歴史をも構築することとなった。

とりわけ、一九八〇年代からのフェミニズム批評の出現は、テクストの読みを大はばに変えたといっていい。Paul を始めとする、この派の批評家たちは、このテクストの前半と後半の垂離を批判的に取り上げ、結末で Mary が Colin に主人公の座を奪われてしまうことについて、抗議の声をあげた。しかし九十年代に入ると、フェミニズムにも変化が起こり、Bixler の読み直しに代表されるような、テクストの積極的な読みを求める動きが始まる。

九十年代に現われたもう一つの大きな動きは、ポスト・コロニアリズムである。Jerry Philips の論文は、この種のものとしては最初であったが、その後、背後にあるインド・英国の表象ぬきにこの作品を語るのは難しく

なってしまった。とりわけ、『秘密の花園』において英印関係が問題となるのは、在印英国人（アングロ・インディアン）の孤児、Mary によって英国に持ち帰られたもの、そしてそれがひきおこす出来事であると考えられる。

国境を超える Mary は、女性/子ども/在印英国人（アングロ・インディアン）という三重にマージナルな存在であり、彼女の目は、国内につもり積もった問題を明るみに出し、前景化する。それは、おとな子どもの権力関係とその転覆可能性、世紀末の地主階級の衰退と立てなおしの緊張関係、ジェンダーの混乱と既成秩序回復の可能性といった点が複雑に絡み合ったものだ。『秘密の花園』をポスト・コロニアリズムの見地から読む意味は、このマージナルなヒロインの目に映る英国自体にある。

ここで論じるのは、Mary がインドから持ち帰ったものが、沈滞しきった英国の因習的な世界、衰退しかけた家父長性社会を活性化する過程である。その結果、皮肉にも彼女自身、自分の救った社会に支配されることになってしまう。しかし、明らかに帝国主義的なイデオロギー下にある作品中で、奇妙にそれを切り崩すのが Mary の目である。最初は帝国の外にあり、最後には家父長制権力の外にある Mary が、逆説的に持つ可能性を考えてみたい。

1．『秘密の花園』における在印英国人（アングロインディアン）(2)

Burnett はインドを背景にした作品を四作発表しており、そのどの作品にも、在印英国人（アングロ・インディアン）の女性が登場する。『セーラ・クルー』、『小公女』における Sara は、その非英国性が、（少なくとも始めのうちは）ポジティブな力をもつ存在として描かれる(3)。『ウォルダーハースト侯爵夫人』の Hester は、モラル的にはともかく、英国では見受けられない異国風の美女という設定である(4)。ところが、『秘密の花園』における、Mary が持つ、在印英国人（アングロインディアン）の刻印は、ネガティブなものでしかなかった。しばしば引き合いに出される冒頭の、彼女の描写はそれを雄弁に物語る。

> ... everybody said that she was the most disagreeable-looking child ever seen. It was true, too. She had a little thin face and a little thin body, thin light hair and a sour expression. Her hair was yellow, and her face was yellow because she had been born

> in India and had always been ill in one way or another. (1)

Mike Caddenが指摘しているように、Maryはいわば、"sick with the contagion "India" "（62）なのだ。Kutzerもまた、『虚栄の市』を引き合いに出し、彼女の顔色が、インド帰りの軍人に特徴的な症状＝人種的退化の表現であることを指摘している。

> The yellowness here is associated with physical illness and perhaps also moral illness, but it also links Mary to the exotic East, to India, and marks her as an outsider not only to Misselthwaite, but to England as a whole. (58)

人種的退化を暗示する「黄色」が、彼女の不健康さ、彼女の病弱さにかぶせられているのは明らかであり、"When I heard you was comin' from India I thought you was a black too"（27）と、女中のMarthaに人種的他者に間違えられさえする。だがMarthaは、すぐに自分の間違いに気がついた。Maryは黒くはなく、「すごく黄色い」(27)だけだったからだ。ここで想起されるのが、『小公女』における在印英国人（アングロインディアン）男性「インドの紳士」もまた、その肌の病的な黄色さのため、中国人という人種的他者に間違われたということである(5)。

だが、大変重要な点で、大人の男性である「インドの紳士」と、少女Maryには大きな違いがある。かたや、自ら植民地搾取に手を染めて、その身を持ち崩した彼とは違い、Maryは、大人たちの行為の、何も知らない犠牲者でもあるからだ。直接的には、仕事にかまけて不在の父と、子どもをないがしろにして自らの欲望に身を任せる母の、そして間接的には、彼らをそういう状態に置くことを許した、もしくは余儀なくした帝国の営みの。彼女が既に六歳にして"tyrannical and selfish a little pig as ever lived"（2）になったのは、両親の養育放棄と、その結果、周囲の英国人たちの、インド人使用人に対する傲慢な態度を、ただ模倣するしかなかったからだ。Marthaに誤解されたときのMaryの激しい怒りの爆発は、Marthaのインドについての無知を責めながら、彼女自身のインドについての無知と、無知のまま、親たちの身振りを真似ていた少女の姿を浮き彫りにする。

> "You thought I was a native! You dared! You don't know anything about natives! They are not people — they're servants who must salaam to you. You know nothing about India. You know nothing about anything!" (27)

Maryは、こうしていわばゆがんだ鏡の役割を果たし、帝国の偉業の真実を暴き出すのだ。

次にMaryが明るみに出した否定的な両親像、Lennox夫妻の役割を、植民地インドとの関わりと共に確認しておこう。Maryの父は、テクスト中ではほとんど言及されない。たった二つの例外は "He held a position under the English Government and had always been busy and ill himself (1)" という説明と、Craven氏のことば "Captain Lennox was my wife's brother and I am their daughter's guardian" (13) だけである。忙しくて病身であるのは、在印英国人男性(アングロインディアン)のステレオタイプであった。だが、同時に、多忙で不在の父という現象は、十九世紀の中ごろから、とりわけ顕著に、英国の中流家庭において進行していた家族形態の変化の一要素だったのである[6]。その結果、家庭の中心は父から母に移り、家庭は「女性化」される。そして父の権威の代わりに、母の精神的な影響力が、道徳的にも肉体的にも、子どもの成長に大きな役割を果たすようになった[7]。そのため、後で述べるように、父ではなく、母こそが親の務めを果たさないとき、とがめられる存在となったのだ。Lennox大佐もCraven氏も不在の父である。だが、テクスト中に、その不在をとがめるような言説は見当たらない。しかも、四人の親のうち、生き残ったただ一人のCraven氏は、英国の親代表として「自分が捨てたはずの子どもたちによって救済される」(戸田山 p. 13) ことを許される。

Lennox大佐についての、二番目の引用からわかるのは、彼には親戚がほとんどいないらしいということだ。彼女の妹であった美しいLiliasが、せむしで気難しい地主貴族Craven氏と結婚したのは、彼女がこの兄以外に係累がなかったからなのだろうか? Mrs. Medlockはきっぱりと否定しているが、お金目当ての結婚だという噂もあったことは事実である (16)。どちらにしろ、出産と共に亡くなり、息子Colinを不具の身にして消えうせる彼女は、少女のような美しさで人々の記憶に残り、美化されてはいるが、母親失格の一つの例を提供している[8]。もっとも、テクストが表立って批判

するのは、母親失格をより明示的な形で代表しているMaryの母のほうである。

当時、在印英国人(アングロインディアン)男性は、現地人にサーヒブと呼ばれており、その妻はメンサーヒブと呼ばれていた。彼女たちは、夫の地位を鼻にかけ、本国以上に慣習と階級性に固執し、派手で怠惰な毎日を送ることで悪名高かった。次の引用に見られるMaryの母は、まさにメンサーヒブの典型をなぞっている。

> . . . her mother had been a great beauty who cared only to go to parties and amuse herself with gay people. She had not wanted a little girl at all, and when Mary was born she handed her over to the care of an Ayah, who was made to understand that if she wished to please the Memsahib she must keep the child out of sight as much as possible. (1)

コレラの発生のニュースを耳にしたとき、彼女は「いつもいそがしくて病身の」(1) 夫とではなく、英国から来たばかりの若い士官と共にいて、彼を懇願するように見つめていた(3)。二人の間に交わされるひそひそ話は、Maryの視点から目撃されただけなので、内容はわからない。だが、ここにメンサーヒブの不貞が暗示されているのは明らかだろう。

ただし、Pat Barrは、典型的なメンサーヒブのイメージは、KiplingやHentyの小説によって神話化されたものであり、必ずしも現実の多様な側面を伝えるものではなかったと述べている[9]。Kiplingから、インドのイメージをかなりの部分、借り受けたと考えられるBurnettは、一般に流通しているステレオタイプを利用して、養育放棄の悪い母親像を、ここに描き出したのである。だが、これがある意味では、英国のColinの母親を美化する必要上、引き立て役を負わせられているともいえる。在印英国人(アングロインディアン)のイメージが、実は英国人自身の悪癖を、隠蔽しつつ表出する鏡として利用されている、もう一つの例だといえる。そこにもうひとつ、父の責任は問わず、母のみを悪者に仕立て上げる言説が絡んでいると付け加えてもいい。

やがて勃発したコレラ禍は、インド人の使用人ばかりか、Maryの両親をも襲い、Maryは死の家にたったひとり残された[10]。十九世紀の英国は、既にコレラの恐怖を何度か経験していた。インドの風土病であったコレラは、

東欧を経由して、数度英国を襲っている。とりわけ一八三二年の流行の思い出を、母から聞いて育った息子は、その恐怖を怪物に具現化し、十九世紀末の不安をすべて表象する存在を作り出した：Bram Stoker の *Dracula* (1897) である[11]。同時代の多くの物語やノンフィクションには、インドとコレラを結びつけた言説が多く見出せる。エドワード朝の文学的想像力にとって、インドを伝染性の病と、両親の堕落、Mary の黄色の消耗に結びつけるのは、きわめて容易なことであったろう。もちろん、真実は逆であって、インドが Mary にネガティブな刻印を捺したのではない。ネガティブな要素がインドに帰せられたのだ。そして在印英国人（アングロインディアン）の登場人物たちは、英国の植民地政策の暗部を隠しつつ、代行させせられる。

こうして Mary は、知らず知らずに病と在印英国人（アングロインディアン）のモラル的堕落を負わされて、英国へ帰ることとなったのである。古い文明の国インドは、『小公女』の Sara には、年に似合わない聡明さと、大人びた魅力を与えたが、Mrs. Medlock は、「おばあさんのような」Mary の周囲への無関心に驚きを隠せない (15)。

かくして、彼女の黄色の顔、薄い髪の毛、「血の代わりにすっぱいバターミルクが流れているような」やせた身体は、植民地が引きずり出す結果となった英国の罪を物語っている (73)。『秘密の花園』が、実は本当に語っているのは英国の問題であり、子どもの問題であるように見えて、実は大人の責任がかかわるという点で、児童文学の植民地性をあらわにするテクストなのである[12]。

しかし、インドと英国を取り出して比較するだけでは不完全である。実は、そのあいだに、ヨークシャという中間点があるからだ。この中間点で、インドと英国の共通点を見出しつつ、自分の位置づけを確認する Mary は、つづいて二つの国の差異を確認し、そのことによって英国への帰化を果たす。類似と差異を通じて、Mary 自身が経験する文化変容とそれが周囲に及ぼす効果を考えてみたい。

2. インド・ヨークシャ・英国

誰も知る人のいないヨークシャの館で、じつは Mary が見なれたものだと親近感を持ったものが二つあった。それは庭のバラのつると、館の奥にある部屋の中の、象牙でつくった象である。ところがこの二つは、よく考

えてみると、まったく逆の方向で、コロニアリズムに基づく、英国性とオリエンタリズムの形象化であり、英国とインドを結びつつ、反転させる鏡の役割を果たすエンブレムなのである。

“Mary Lennox knew they were roses because she had seen a great many roses in India.”（78）という一文は示唆的である。英国の国花バラは、入植者によってインドへもたらされ、そこで無理に育てられていたのであろう。そのレベルでは、インドのバラは、Mary 自身の比喩になる(13)。同時に、植物を異国の地に植え、育てるのはまさに「植民」行為の比喩である(14)。インドにあったバラは、英国の植民行為の結果であり、Mary もまたそうだ。だが、同時にこのことが示しているのは、Mary の庭造りが、両親の、そして英国の、植民行為の模倣であるということだ。Mary は英国に渡る前、インドでも二度、庭を造っていた。

その二つは、豊饒性と生命力を称えられる「秘密の花園」の影のような分身であり、豊かな再生の場となる花の庭を際立たせるため、否定されて払拭されるために存在する。コレラが勃発したまさにその朝、Mary は庭をつくって遊んでいた。たったひとり取り残された不安を怒りにすり変え、なんとかその場を制御しようという試みなのだ。だが、その試みは口汚いののしりのことばで終わり、植えた花もすぐに枯れてしまう。

> She was actually left alone as the morning went on, and at last wandered out into the garden and began to play by herself under a tree near the veranda. She pretended that she was making a flower-bed, and she stuck big scarlet hibiscus blossoms into little heaps of earth, all the time growing more and more angry and muttering to herself the things she would say and the names she would call Saidie when she returned. (2)

次に、Mary は引き取られた先の牧師の家庭で、また庭を作った。これもまた同じように、彼女にできる精一杯の自己防御の試みであり、自分だけの空間の確保を意味する。親切ではあっても、貧乏で多忙な Crawford 夫妻は、彼女を理解して心を開いてやることなど到底できなかったし、子どもたちは “Mistress Mary” という伝承童謡で、庭を造る Mary をからかい、生意気な少年 Basil は、彼女の庭造りに口を出して「侵略」し、破壊しよう

とする(9)。Maryに与えられたこのあだ名はしかし、こののち、彼女の怒りの力をあらわす指標となる。

この二つの庭は、英国でMaryが再生させる廃園を先取りしている。だが、常夏の灼熱の気候が花を枯らし、怒りと倦怠と病をもたらすインドの庭と、めぐる季節が再生と成長を促す英国の庭の対比はあまりにも明らかだ。その違いを確認し、分節化するのが、英国でMaryが経験する文化変容である。それは後で詳しく追うことにして、インドとヨークシャが作り出す鏡像を、他のところにも探してみよう。Lennox夫妻と、Craven夫妻の相関関係については、先に述べたが、いとこ同志であるMaryとColinの相似はもっと明白である。

二人の共通点は多い。両親の無視、病気がち、孤独、同じ年齢。二人とも、主人公にはあるまじきほど、"disagreeable-looking"(1)である上、破壊的な癇癪の持ち主だ。モラル的にも身体的にも「理想的な子ども」像と、これほどかけはなれた主人公の登場は画期的だった。始めて出あった時、お互いを幽霊だと思うこの二人は、明らかに、お互いにとって分身的存在である。鏡に映すように、二人は自分の否定的な側面を互いの中に見る。

夜な夜な聞こえる不思議な泣き声、家族の秘密として屋敷の奥に隠された病人の存在は、*Jane Eyre* (1847)から、強い影響を受けていることを感じさせる。屋根裏に隠されたJaneの狂気の分身、Berthaに当たるのがColinであり、その意味でもMaryとColinのひそかな同一性が例証できる。これは多くの批評家が指摘する点であるが、とりわけColinを十九世紀の女性の病と関連づけた、Shirley FosterとJudy Simonsから例を引いておく。

> The appearance of Colin as Mary's psychic twin, a personification of her own repressed rage and frustration, is similar to the use of Bertha Mason in *Jane Eyre*, a wild expressive complement to the passionate self that lurks behind Jane's taciturn exterior. (178)

二人の同一性だけではなく、Colinの病が女性の疾患とされていたヒステリー症に極めて近いということは、女性化された彼の状況を示している

が、これはまた後に詳しく述べる。

また、Foster & Simons は別のところで、"The social privilege that Colin enjoys as a member of the English squirearchy is made analogous to Mary's position as a child of the ruling class in imperial India" (182) と述べ、二人の社会的地位の類似性を指摘しているが、これはそのまま、次に論じることになる、英国の階級性とコロニアリズムの類推につながる。そのひとつの例は、二つの「現地語」、ヨークシャ方言とインドのネイティブの言葉の等価性である。

> "In India the natives spoke different dialects which only a few people understood, so she was not surprised when Martha used words she did not know." (61)
> "I'm learning it as if it was French," said Mary, rather coldly. "It's like a native dialect in India. Very clever people try to learn them. I like it and so does Colin." (194)

しかし、このふたつの言葉の同一視は、越境するヒロインによってのみ可能だ。なぜなら、彼女は両方の地方語を体験するたった一人の人物だからだ。しかも、彼女の持つ母国語、英語の正統性を軸としてはじめて、二つは地方語として位置づけられる。インドのネイティブのことばを学ぶことのできるのは、「とても頭のいい」植民者であり、非植民者が英語を話すとき、それは chichi 訛りをあざ笑われる不完全なものにしかならない。ヨークシャの方言を、「フランス語を学ぶように」学ぶのは、支配階級の Mary と Colin であり、被支配階級の Dickon は「正統な」英語を話せない(15)。二つの地方語の価値の切り下げと、英語に対する「他者」化という、この一連の言語を通じた比喩関係により、Mary は Colin と同様、インドの支配階層の位置に身を置いており、今度は英国の内部に、類似のものとして自分の階層を同定する。

もうひとつ、Mary が持ちこんだヨークシャとインドの類似性で、より重要な意味を持つのは、Colin の傲慢でわがままな態度とラジャのそれの同一視である。女中の Martha に対して「えらそうな」態度を取る Colin を、黙って眺めていた Mary は、こう考えていた。"Once in India I saw a boy who was a rajah. He had rubies and emeralds and diamonds stuck all

over him. He spoke to his people just as you spoke to Martha" (144)。

さらにMaryは、ColinのCraven医師に対する、人を人とも思わぬ態度にも、ラジャを思い出す(149)。Maryは、このColinの態度をDickonと比べながら、明らかにColinの専制的な態度を批判しているのだが、その批判がクライマックスに達するのは、大喧嘩をしたとき、Maryが彼に投げつけた非難の言葉であった(168-9)。この場面での爆発の意義と効果についでは後で詳しく述べていきたい。だがここで確認しておきたいのは、これ以降、さげずみの言葉としてMaryが投げつけていたラジャの比喩は、Colinに乗っ取られ、彼によって、積極的に学習され、地位を高め、箔をつけるために用いられていくということである。

> "Mary," said Colin, turning to her, "what is that thing you say in India when you have finished talking and want people to go?"
> "You say, 'You have my permission to go,'" answered Mary.
> The rajah waved his hand.
> "You have my permission to go, Roach," he said. "But remember, this is very important." (208-9)

彼の態度は召使や看護婦の失笑を買うが、それは彼がまだ子どもに過ぎないからだ。もし彼が大人だったら、はたして彼らは笑っていられただろうか。しかも、このすぐあとに庭師頭のローチがもらしたように、彼はあたかも "a whole Royal Family rolled into one — Prince Consort and all (209)" として、英国の君主のイメージで見なおされる。インドの支配者は英国の支配者に吸収・同一化されたのだ。

Colinがラジャであれば、当然、Dickonが蛇使い(154, 199)のアナロジーで語られるのも自然なことだ。MaryがDickonを認識したのは、まずその類推からであった。

> Then Mary realized that somehow she had known at first that he was Dickon. Who else could have been charming rabbits and pheasants as the natives charm snakes in India? (97)

ラジャという言葉と同様、これは当然、Colinに採用された。Maryが

Dickonを魔法使い―いい魔法使いと確信すると、(219) Colinもまた、その言説を吸収し、“Dickon, you are the most Magic boy in the world!” 257と叫ぶ。

こうして、ひとつひとつ、Maryは英国の田舎屋敷にある階級性を、帝国と植民地の上下関係とアナロジカルに捉えていく。植民地の権力構造が、国内の階級性を反映していること、内外がお互いを反復して比喩的関係をつくっているということを、越境者Maryの目が見通し、あらわにするのである。

しかも、Maryは、権力中枢である館の最も深部に、アナロジーではなく、事実上の「インド」が存在していることを発見してしまう。それは、バラに対峙するものとしての象牙の象である。インドに植民されたバラ、英国性の象徴とは逆に、英国へ持ちこまれ、オリエント趣味の一環として陳列された象はオリエンタリズムの象徴である。

> There were embroidered hangings on the wall, and inlaid furniture such as she had seen in India stood about the room. (56)
> In one room, which looked like a lady's sitting-room, the hangings were all embroidered velvet, and in a cabinet were about a hundred little elephants made of ivory. . . . Mary had seen carved ivory in India and she knew all about the elephants. (57)

象牙の象、タピストリー、オリエント趣味のコレクションは、館の富がどこかではっきりと、東洋に連なっていることを証明している。さらに重要なのは、館の奥に秘められた象の象牙が、閉じこもったままの青白いColinの顔色の比喩として再び現われるということだ。

バラがMaryの比喩であるならば、象牙はColinの比喩である。彼の顔立ちの描写は、次のようなものだ：“The boy had a sharp, delicate face, the colour of ivory, and he seemed to have eyes too big for it.” (124)。少年の病いはここでもまた、こうしてインドと関連づけられる。しかしあとで述べるように、彼の病気は、まさにその富がもたらした退廃を思わせる。屋敷の主Craven氏が、自己憐憫にかまけて務めを怠っている今、その不在は荒廃と無秩序と、後継ぎの病いを引き起こしているのだ。

そもそも見たこともない故郷へ、暴力的に植え変えられたMaryの、

環境適応の試みは、バラと象牙を認め、その類推によって周囲を見極めていくことを必要とした。だが、彼女にこれ以上の関連を見つけ出されては困る。Mary はこれから、英国の少女としてアイデンティティを確立していく必要があるのだから。帝国の罪をあばく深部にまでいたることなく、インドと英国の違いを理解せねばならない。だから今度は、二つの文化の相違点を強調し、英国性を特権化していく道筋をたどらねば、Mary の英国への同化は実現しない。Mary による差異化の過程は、同時に彼女自身の文化変容——帰化(ナチュラライゼーション)/自然化の過程でもある。

始めから Mary は好奇心の強い子だった。帰って来る前から、彼女のまだ見ぬ故郷への興味は、「インドにないもの」に掻き立てられている。

> What sort of a place was it? And what would he [Mr. Craven] be like? What was a hunchback? She had never seen one. Perhaps there were none in India. (12)
> Mary had begun to listen in spite of herself. It all sounded so unlike India, and anything new attracted her. (14-5)

大きな違いがあるのは、当然のことながら気候である。大きなイデオロギー上の負荷を追わされた比較が、地獄のような、人を狂わせる、堕落させる、不健康な熱帯の気候と、新鮮で、生き生きとして冷たく、再生を促す、天国のような英国の気候のあいだに、繰り返されてきた(16)。『秘密の花園』もまたその再生産に、かなりのイメージ上効果を付け加えたことは間違いない。例を挙げると、

> In India she had always felt hot and too languid to care much about anything. The fact was that the fresh wind from the moor had begun to blow the cobwebs out of her young brain and to waken her up a little. (48)

> Never, never had Mary dreamed of a sky so blue. In India skies were hot and blazing; this was of a deep, cool blue, which almost seemed to sparkle like the waters of some lovely, bottomless lake... (60)

> the fresh, strong, pure air from the moor had a great deal to do with it [to amuse herself, had set her inactive brain to work and was actually awakening her imagination] . 67.... In India she had always been too hot and languid and weak to care much about anything, but in this place she was beginning to care and to want to do new things. Already she felt less 'contrary' though she did not know why. (68)

ここで、彼女はインドで作っていた自分の庭の不毛性をつくづくと思い知らされることになり、自分が育った環境と、英国の風土の違いを考え始める(69)。そしてそれをどう価値判断するかを。「野蛮な(サヴェージ)」子と呼ばれるMaryは、身体を適応させることはもちろん、精神的にも礼儀を知り(シビライズ)/文明化、つまり英国化(アングリサイズ)そして天使化(エンジェリサイズ)されねばならないのだ。

館にたどりつくや否や、彼女は瞬く間に、見知らぬ世界に放り込まれた。"'It is different in India' said Mistress Mary disdainfully. She could scarcely stand this." (27) という、Maryが繰り返すフレーズは、慣れ親しんだものから暴力的に切り離されて、孤独にさいなまれる彼女が、何とかして自分の立場を維持し、習慣を取り戻そうという必死の試みであるが、Marthaにはまったく通じない。Maryがまず学ぶのは、Marthaがアヤとは違う、ということだった。だが、本質的に根無し草の、在印英国人(アングロインディアン)の文化的孤児として、そして親に放置された精神的孤児として育ち、そして文字どおりの孤児となった今、Maryは教育のしがいのある飲み込みの早い少女であった。

> ... before she was ready for breakfast she began to suspect that her life at Misselthwaite Manor would end by teaching her a number of things quite new to her — things such as putting on her own shoes and stockings, and picking up things she let fall. (30)

しかし、ここで注意しておきたいのは、Maryが真に英国流を学ぶ前に、きわめて特殊な状態にある英国の周縁世界、「ヨークシャ流」を経由するということである。ヨークシャは、ColinとCraven氏が無力である限り、英国でありつつ、階級とジェンダーを超越した、一種の牧歌的ユートピアだっ

た。Burnettがインドと英国のあいだに、巧妙に挿入したのは、現実のヨークシャというよりは、ロマンティックな子ども時代と自然謳歌の牧歌的世界であり、それは奇妙にも作品の中で、英国文化批判として作用するのだ。

"if there was a grand missus at Misselthwaite I should never have been even one of th' under-housemaids.... this is a funny house for all it's so grand" (26) というMarthaの言葉が示すように、人里はなれた、主人不在の館は一種のアナーキー状態にある。ここではMarthaもBenも、Maryに人間として振るまい、人間として応えることを当然のように期待する。インドでは気に入らない事があるとアヤの頬を平手打ちにしていたこの傲慢な子どもも、Marthaを人として見ざるをえない。

> She wondered a little what this girl [Martha] would do if one slapped her in the face. She was a round, rosy, good-natured looking creature, but she had a sturdy way which made Mistress Mary wonder if she might not even slap back — if the person who slapped her was only a little girl. (25)

MaryはMarthaに「ありがとう」(72)ということを覚え、Benに対しても「インドの召使」に対するようにではなく、もっと丁寧(文明的)に(90)に接することを学んでいく。

だが、注意せねばならないのは、もしMarthaがよくしつけを受けた都会の女中だったとしたら、彼女の主人の子女への仕え方は、「インドのやり方」に近かったかもしれない、ということが示されていることだ (31)(17)。ヨークシャはその意味で、インドでも英国でもなく、その中間点にある。英国を知らないMaryは、かまいつけずにほっておく、というのが英国流なのかと思うが(54)、それは彼女の勘違いであって、これはヨークシャ流—自然の中での自然な子育てという理想—なのである。ここに英国流を持ちこもうとする唯一の人物Mrs. Medlockがいうように(59)、ガバネスでも雇えば、Maryは女の/子どもとして管理され、閉じ込められることとなったであろう。

かくして、Maryは理想的な信頼の上での半放任状態という、Dickonの母Susanによる、ヨークシャ流子育ての恩恵にあずかる(18)。MaryはSusanのことを評して、「インドの母親たち」(87)とは大違いだと語る。

だが、もし彼女が英国の中・上流の母親の姿を見ていたら、いったいそれはメンサーヒブと違っていただろうか？

英国に彼女が持ち帰ったのは、インドを比較の原点として、英国を（高く）評価するパースペクティブであったのは確かだ。だが、そこにはこうして「英国性」批判すれすれの言説も含まれていた。インドと英国は違う、が、類似する。Mary が国境を超えるときに生まれるそのダイナミクスが、この作品のプロットを活性化する原動力であり、テクストを高度に曖昧なものとして、決定不可能にするゆらぎなのである。

だが、彼女が国境を超えるとき、もう一つ揺らぎ交代するものがある。現実とお話の世界である。『小公女』の Sara 同様、Mary も語り手である。インドに関わる言説は、すべて彼女がインドから持ち返る物語であるともいえる。Mary が Colin を庭の物語で癒したとすれば、彼の力を回復させ、彼にラジャという名称をかぶせることで、君主の権力の物語を教えたのもまた彼女である。Mary の物語は Colin を力づけ、復位させた結果、階級性を復活させる。その結果、理想化された田舎、ヨークシャは消えうせる。次に注目したいのは、語り手としての Mary が、英国化されつつ、語る物語とその効果についてである。

3．語り手 Mary

これから暮らすことになるおじの住む館について、Medlock 夫人が Mary に聞かせたのは、まさにゴシック小説さながらの、おどろおどろしい物語であった。Mary は次のような感想を抱く。

> A house with a hundred rooms, nearly all shut up and with their doors locked — a house on the edge of a moor — whatsoever a moor was — sounded dreary. A man with a crooked back who shut himself up also! (16)

これがお話の世界でなくてなんだろうか。だが、実は Mrs. Medlock の描写が、Mary に引き起こした連想こそ、彼女をヨーロッパへ連れ戻す、文化教育の一端を担っているのである。家庭教師に嫌われ、教育をまともに受けていなかった彼女も、本を読むのは好きで、ヨーロッパの昔話は知って

いた。「せむし男」への言及は、彼女にフランスのおとぎ話を思い起こさせている。

> She had just remembered a French fairy story she had once read called Riquet a la Houppe. It had been about a poor hunchback and a beautiful princess, and it had made her suddenly sorry for Mr. Archibald Craven. (16)

Foster & Simons はこの物語が、野獣を愛の力で変容させる「美女と野獣」の一バージョンであり、元来、女性を支配する男性の話であったということに注目し、これが Mary についての物語の結末を予知していると論じている(177)。Mary はこうして、みずからが美女(ベル)という癒し手を引きうけねばならない野獣の館へと入り込むことになった。だが、このおとぎ話を思い出したとき、彼女がはじめておじを気の毒に思ったことにも注意したい。彼女の必死に冷淡を装った「無関心」という防御の壁が崩れ、同情と共感の権化とされた「天使」への第一歩が確かにここに見られる[19]。

こうしてお話の世界だった英国が現実に歩み寄ってくると、必然的に連動するのが、いままで Mary にとって現実だったインドがお話の世界になるという逆転である。しかも逆転はもう一つあった。彼女は受動的な聞き手から、語り手になる。

Mary はもともとお話を聞くのがとてもすきだった。アヤの繰り返す同じお話に飽きていた彼女は、英国に来る時、新しいお話を期待していた。しかし、今度は彼女自身が語り手として、お話を語る番だったのである。Sara の語る物語が聞き手を魅惑したように、物語の国からきたシェヘラザート、Mary は Martha と、その兄弟たちにとって、エキゾチックな物語を語る語り手として、聞き手にも、さらに重要なことには、その物語自体にも権威を持つ存在となるのである。Mary の語るインドの話は、彼女の経験した孤独と疎外、けだるさと病いの記録ではなく、Martha の素朴な、トラクト本仕込みのインドについての知識 (27) を脚色し、展開して、聞き手の期待に応えるフィクションである。そうすることで、Mary は自らの過去を自ら物語化し、支配するのだ。彼女は自分からお話を提供する。

"I'll tell you a great deal more before your next day out," she

> said, "so that you will have more to talk about. I dare say they would like to hear about riding on elephants and camels, and about the officers going to hunt tigers". (69)

そのうち、インドの物語は次第にリアリティを離れ、聞き手の欲する虚構へ変容していく。次の引用はしばらく後、Marthaの口述をMaryが書き取った、Dickon宛ての手紙である。

> Miss Mary if going to tell me a lot more so that on my next day out you can hear about elephants and camels and gentlemen going hunting lions and tigers. (86)

現実には、インドにはライオンはいない。もちろん、Marthaがここで見たこともない野獣の名を適当に使ったのかもしれない。だが筆記したMaryは、それを直さなかった。二人にとって、もはやインドは遠いお話の国に過ぎないのだ。Maryのお話は、彼女の英国化につれ変化する。Colinを落ち着かせる癒しのお話に、その変化ははっきりと現われている。

> He made her tell him A great deal about India and about her voyage across the ocean (129).
> "... I will do what my Ayah used to do in India. I will pat your hand and stroke it and sing something quite low." ... she ... began to stroke and pat his hand and sing a very low little chanting song in Hindustani. (137)
> "Do you suppose that instead of singing the Ayah song — you could just tell me softly as you did that first day what you imagine it looks like inside?" (181)

こうして要求される物語が変わっていくと、彼女の中で、ますますインドは遠い国になる。

これが彼女の英国性への文化変容である。Maryがインドで知っていた「黒い」魔法は、ヨークシャに当てはめられてヨーロッパ化されて「白い」魔法に変貌する(235)。インドの魔法使いは、牧歌に取りこまれてDickon

というヨークシャの「ムアの天使」へと馴化されていく (189)。だが、なかでも英国化されることで、皮肉にも彼女自身の立場を最終的には危うくする結果となったのは、前にも述べたとおり、ラジャという物語であった。

> "Once in India I saw a boy who was a rajah. He had rubies and emeralds and diamonds stuck all over him. He spoke to his people just as you spoke to Martha. Everybody had to do everything he told them — in a minute. I think they would have been killed if they hadn't." (144)

この物語が非常に気に入ったらしく、Colin はすっかりこれを取り入れ、物語の主人公をのっとってしまうのである。こののち、彼はラジャの名称を名乗り始めるのだ。のみならず、彼女は Colin にラジャのふるまい方を教えさえする。

> "Mary," said Colin, turning to her, "what is that thing you say in India when you have finished talking and want people to go ?"
> "You say, 'You have my permission to go,'" answered Mary.
> The rajah waved his hand.
> "You have my permission to go, Roach," he said. "But remember, this is very important." (208-9)

Colin のわがままに、ラジャという物語を与えることで、彼女は彼の復位を準備し、滅びかけた帝国を支えなおす神話を与えたのである[20]。知らず知らずのうちに、地主貴族の後継ぎの権力を容認し、彼に物語の主導権をすっかり委ねてしまったのは Mary 自身だった。だが実のところ、衰退の道をたどる英国の支配階級を目覚めさせ、揺さぶり、蘇らせたのは、天使の癒しの物語ではなかった。それは、Mary が英国へ、適応していく途上で爆発させるマージナルな力、子どもの言葉の暴力というエネルギーがもたらした効果だったのである。

Marquis は Mary の言葉の持つ力について、"... the vocabulary of her rage and the terms of abuse she has learned at her Indian nurse's side" (183) と指摘している。これは、Mary の、マージナル性ゆえにもつ力を

説明しているといえる。だが重要なのは、つねに自分より従属する立場のアヤやMarthaに向けられていた“terms of abuse”が、死にかけた屋敷の後継ぎという支配階級、しかし実は自分と非常によく似た「甘やかされ利己的な子ども」に、向かって爆発するときだ。そのパワーが、ヒステリーという文化的呪縛、呪われた血の遺伝というゴシック的物語に絡め取られていたColinを解き放つ。

> “You stop! I hate you! Everyone hates you! I wish everybody would run out of the house and let you scream yourself to death! You will scream yourself to death in a minute, and I wish you would!” (176)
> No one but Colin himself knew what effect those crossly spoken childish words had on him. .... And now that an angry, unsympathetic little girl insisted obstinately that he was not at all as he thought he was, he actually felt as if she might be speaking the truth. (178)

Foster & Simonsは、“Colin must be socialized out of his negative femininity”(186)と述べ、女性化されていたColinが、このMaryの言葉の暴力のおかげで、正常な男性性を回復すると解釈している。だがこれだけでは、このテクストの読みは不充分であろう。なぜなら世紀末の堕落恐怖をここに読みこむ必要があるからだ。秘密の花園を聖杯神話の一バージョンと捉えるのはある意味で正しいが、これは歴史性のない神話の世界での出来事ではない(21)。世紀転換期の衰退しかけた帝国は、女性・子ども・植民地を犠牲にすることでのみ、立ち直ることが可能なのだ。Maryは「インドの紳士」を救済したSaraと同じ役割を果たしており、Craven父子の遺伝性疾患は、彼らが漁夫王でありつつ、「インドの紳士」と同じ症候—loss of gender/class/cultural identityを抱えていることを示している(22)。

先にも少し指摘したとおり、Colinが退廃を表象していることは明らかである。先祖代々六百年も続く広大な古い屋敷(291)は、Marthaに彼の血統の古さと、淀みを表象している。その中に閉じ込められ、寝たきりのColinの「鋭く削られた象牙のような白い顔」(286)は、彼の女性化・退化

の表現である。若死にするに決まっているけれど、「お父さんは僕が自分そっくりになるのを見たくないんだ」(127)というのは大部分、Colinの想像に過ぎなかったにしろ、比喩的には正しい。召使たちの間では、Colinの「不気味な様相と、気違いに近い性格」(207)について、おおげさなうわさが広まっていたのである[23]。

連動して同時に、Maryはもうひとりの女性化されていた男性を英国に連れ戻し、癒さねばならなかった。それは、Colinに病弱の遺伝的形質を与えた父、領地と子孫を放棄して、祖国の荒廃を招いたCraven氏である。二十七章目の、外国をさまようCraven氏の描写から、突然、彼の復活の物語が始まるのだが、彼の姿は明らかに、遺伝性かつ伝染性の世紀末の衰退と不安を暗示している。

> When he travelled about, darkness so brooded over him that the sight of him was a wrong done to other people because it was as if he poisoned the air about him with gloom. Most strangers thought he must be either half mad or a man with some hidden crime on his soul. He was a tall man with a drawn face and crooked shoulders, and the name he always entered on hotel registers was 'Archibald Craven, Misselthwaite Manor, Yorkshire, England'. (283)

だが、故郷で、秘密の花園が、次第によみがえりつつあるのと共時性を持って、なぜかはわからないけれど、彼もまた自分が新たに蘇ったのを知る。

外国からきた子どもが英国を救う、というパターンは、Burnettの作品に共通のものである[24]。ここでもまた、Maryという、境界を超えてやってきたヒロインは、子どもであり、女であり、よそ者であるというマージナルな力をもって廃園をよみがえらせ、世紀末の不安と退廃を追い払い、王を復位させたのである。

おわりに

ここでわれわれは、最近の『秘密の花園』をめぐる重要な論点に行きつく。MaryとDickonは、主人公の場を奪われ、彼女の物語は彼の物語に接

木されて、このテクストは、最終的には、男性/地主階級/アングロサクソニズムの復活を称えることになったのだろうか。

事実、彼女が地主貴族の家父長制を、再び強化する結果を迎えたことは否定できない。だが、Mary は因習的な女性の役割を「実際に」負わせられることもなければ、本来の自分を曲げることに葛藤を経験するわけでもない。彼女が父子の再会の大団円で忘れ去られているということは、彼女が最終的に、社会に組み込まれないマージナリティを保持しつづけていることを暗示している。彼女は Sara のように、テクストの内部でお父様の娘になることはないのだ。Mary の混交性、異質性はそれほど簡単に英国化/天使化されていない。「つむじ曲がりの Mistress Mary」と Crawford 家の子どもたちに投げつけられたいじめのことばを、再び冠して語り手が Mary を呼ぶとき、それは彼女が従順な普通の英国の女の子になることを拒み、権威に対抗しようとするとき(23)、そして自分の愛するもの、所有するものを守り通そうと、自己主張するとき(101)だ。"Mistress" は女主人を意味する[25]。Mary の「インド風のいばった言い方」は、英国において彼女が唯一持つ、自己主張の方法でもある。たしかにそれは帝国主義下の白人女性の主張ではあった。だが Mary は両親の帝国主義的姿勢を脱コンテクスト化し、大人への、慣習への挑戦手段に変じている。

『秘密の花園』を Burnett の作品中でも際立って豊かなものにしているのは、庭師や召使など、いままではその言葉が描かれることのなかった人々の、会話やものの見方が導入されているところにある。そこで興味深いのは、やはり社会的にマージナルな部分に位置する女中や庭師が、Mary の女の子としての、インドからきた子としての可能性に気がついているということだ。Mrs. Medlock は、Susan の言葉を引いて、次のように述べている。

> 'When I was at school my jography told as th' world was shaped like a orange an' I found out before I was ten that th' whole orange doesn't belong to nobody. No one owns more than his bit of a quarter an' there's times it seems like there's notenow quarter an' there's times it seems like there's not enow quarters to go round. But don't you — none o' you — think as you own th' whole orange or you'll find out you're mistaken, an' you won't find it out without hard knocks.' What children learns from

> children," she says, "is that there's no sense in grabbing' at th' whole orange — peel an' all. If you do, you'll likely not get even th' pips, an' them's too bitter to eat." (195-6)
>
> "Well, there's one thing pretty sure," said Mrs Medolock. If he does live and that Indian child stays here, I'll warrant she teaches him that the whole orange does not belong to him, as Susan Sowerby says. And he'll be likely to find out the size of his own quarter." (209)

Maryが「インドからきた女の子」(208)と呼ばれる存在である限り、男性の支配者に、「世界が丸ごと彼のものではない」と教えることができるだろう。オレンジをまるごと我がものとしたために、親は苦い種を味わうこととなったが、子どもたちは「新しい考え方」を、お互い同志に学ぶ可能性があるのだ。

結末で、物語から消え去ることで、Maryはひそかにマージナリティを確保した。少なくとも、彼女はSaraのように帝国の母候補になることは避け得たのだ。『秘密の花園』の結末に王の復位ではなくMaryを追い求めるならば、それはいまだ開かれたままなのである。

注

(1) Frances Hogdson Burnett, *The Secret Garden* 初版発行1911年。使用したテクストはPuffin 1994年版で、引用は文中にページ数で記す。

(2) この時代の「在印英国人(アングロインディアン)」が意味するものについては、川端有子1 pp. 3-4参照。

(3) 川端2参照。

(4) 川端1参照。

(5) 川端3参照。

(6) John Tosh p. 93.

(7) Tosh p. 90.

(8) 戸田山氏は、この作品を悪い両親が子どもに救われる期待を委ねたものと解釈している。

(9) Pat Barr, (Introduction).

(10) コレラ勃発事件は、Mrs. Ewing, *Six to Sixteen* (1875) の冒頭から借用したものと考えられる。この作品は、キプリングの愛読書でもあった。

(11) 丹治愛参照。

(12) 戸田山参照。
(13) 逆に館で Mary が見出した葉のないつるバラは、これからの Mary の成長を予期させる
(14) 庭作りと植民行為のアナロジーについては Donald E. Hall 参照。
(15) 言語の問題については、小野俊太郎 pp. 160-1 参照。
(16) たとえば、『ジェーン・エア』の中の、Rochester の述懐する西インドの夜の描写。
(17) もっと正確にいうならばここの「インドのやり方」とは在印英国人(アングロインディアン)のやり方である。
(18) あまり手入れの行き届きすぎていない庭という比喩で表わされる (107)。
(19) Mary が引き受けるおとぎ話のヒロインは、「眠りの森の美女」でもあるが、ここでは受動的ヒロイン像が転覆される。日に日に目覚めるヒロイン (89) は、その過程で眠る王子 Colin をたたき起こすのである。
(20) 甘やかされた坊やをラジャと呼ぶ例は、同時代の児童文学に散見される。
(21) Humphrey Carpenter はこの作品に、漁夫王や荒地など、聖杯伝説を読み込んでいる。
(22) 川端 3 参照。
(23) "insane"、"crippled" という表現は、血の淀みと、衰退を示唆するが、同時に Burnett の小説 *The Shuttle* (1906) に登場する少年 Ughtred を強く喚起させる。彼の障害は、父の母への暴力のせいとされているが、父が病んでいる性病の遺伝とも推測できる。
(24) 『小公子』(1886) のアメリカ人 Cedric は英国の老貴族を癒し、『小公女』(1905) の Sara は「インドの紳士」を慰める。
(25) この作品は最初、Mary の中心性を強調する *Mistress Mary* という題名で発表された。

引用文献

Barr, Pat. *The Memsahibs : In Praise of the Women of Victorian India*. London : Century, 1976.

Bixler, Phillis, "Gardens, Houses, and Nurturant Power in *The Secret Garden*" in *Romanticism and Children's Literature in Nineteenth Century England*. ed. James Holt Mcgarvan, jr., 1991 : 208-224.

Burnett, Francess Hodgson. *A Little Princess*. Puffin, 1994. (First published, 1905).

——. *The Secret Garden*. Puffin, 1994. (First published, 1911).

Cadden, Mike. "Home is a Matter of Blood, Time, and Genre : Essentialism in Burnett and McKinley", *ARIEL : A Review of International English Literature*, 28 : 1 (1997) : 53-67.

Carpenter, Humphrey. *Secret Gardens : The Golden Age of Children's Literature*. Boston : Houghton Mifflin Company, 1985.

Foster and Simons. *What Katy Read : Feminist Re-Readings of 'Classic' Stories for Girls. Kent* : Croom Helm, 1995.
Hall, Donald E. "We and the World" : Juliana Horatia Ewing and Victorian Colonialism for Children. " *Children's Literature Association Quarterly* 16 : 2, (1991) : 51-55.
Kawabata (3). "The Story of The Indian Gentleman — The Recovery of the English Masculine Identity in *A Little Princess." Children's Literature in Education*, Vol. 32 : 4 (2001) : 283-293.
Kutzer, M. Daphne. *Empire's Children : Empire and Imperialism in Classic British Children's Books*. NY & London : Garland, 2000.
Marquis, Claudia. "The Power of Speech : Life in *the Secret Garden", Journal of the Australasian Universities Language & Literature Association* 68, (November, 1987) : 163-187.
Paul, Lisa. "Enigma Variation : What Feminist Theory Knows About Children's Literature", *Signal : approaches to children's books*, 54 (September 1987) : 186-201.
Philips, Jerry. "The Mem Sahib, the Worthy, the Rajah and His Minions : Some Reflections on the Class Politics of *The Secret Garden." The Lion and the Unicorn* 17 : 2 (1993) : 168-194.
Tosh, John. *A Man's Place : Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England*. New Haven and London : Yale UP, 1999.
小野俊一郎『ピグマリオン・コンプレックス』ありな書房、1997.
川端有子(1)「フランシス・ホジソン・バーネットのインペリアルゴシック――『ウォルダーハースト侯爵夫人』を読む」愛知県立大学外国語学部紀要 33 言語文学編 (2001) : 1-20.
川端(2)「インド/フランス/イギリス―『小公女』における文化の多義性」*Tinker Bell* 46 (2001) : 16-31.
丹治愛『ドラキュラの世紀末 : ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東大出版会、1977.
戸田山みどり「インドからきた女の子」――『秘密の花園』における植民地と子ども」*Tinker Bell* 42 (1996) : 3-14.

What Mary has brought back :

——Dynamics of England-India in *The Secret Garden*——

Ariko Kawabata

The Secret Garden is not only the most successful book among Burnett's work, but also one that allows the widest range of interpretation. With its rich symbolism and ambiguous expression as well as the innovative status in the history of children's literature, it is one of the most frequently discussed texts ever written for the young. Moreover, here multifarious elements such as literary, cultural, social, historical, political, and ideological mingle together, helping to make this text into an extraordinarily unique intertexual space.

Recently two trends of criticism have completely changed the way of interpreting *The Secret Garden* : feminist criticism from the 80's and postcolonial thinking from the 90's. One of the best and first criticisms from the latter field is the one by Jerry Philips, in which he points out that '*The Secret Garden* is not so much a discourse on the end of empire as an embryonic commentary on the possibility of blowback'.[1] It is the blowback, or what has been brought back from India as a consequence of the British colonial policy that is the issue in point.

An Anglo-Indian child, whose existence itself is the outcome of the policy, underlines the issue. Mary is female, a child, and an Anglo-Indian, who brings it back across the boundary between India and England. Her point of view discloses and foregrounds what matters most in England : the power relationship between adult and child and its potential subversiveness, decline of the landed gentry at the turn of the century and its tense attempt to restoration, gender confusion and

---

[1]Jerry Philips, "The Mem Sahib, the Worthy, the Rajah and His Minions : Some Reflections on the Class Politics of *The Secret Garden*", *The Lion and Unicorn* 17, 1993, p. 169.

possible return to the status quo, and so on. These are all mingled together intricately. The significance of reading *The Secret Garden* in postcolonial terms lies in the Empire itself that is observed by this marginal heroine.

In this article, I will analyze the process of stagnation in the conventional society of England, and its decaying patriarchal system that are being revitalized by what Mary has brought back from India. Then ironically enough, she herself is in turn dominated by the society which she revives. This is a story of the repeated dynamics between England and India, the colonizing and the colonized, concerning land ownership, culture and story telling. But Mary never actually belongs to either side, and I will argue that her constant marginality paradoxically endorses her possibility as a cultural critic.